

「教育は子どもの権利」—2002年ユゴーとの「出会い」

川口幸宏

とにかく、パリの地下鉄構内をはじめ、市中に張り出されている看板は巨大である。一つの看板で横 3m 縦 2.5m はあるだろう。巨大な看板は商品案内であったり、映画の広告であったりと種々雑多である。なかには、まず日本ではお目にかかることのできないような性的表現のものがああり、その手のものになじみの薄いぼくなどは、どきまぎしてしまうのだが・・・。

その日はパリの 3 月にしては陽気な気候であった。日々、一日中雨雲が走っており、いずれかの時間に必ず雨が降り、肌寒い、それがパリの 3 月の印象であったのだが、空には雲一つかかかっていないと言っていいほど。



リュクサンブール公園のマロニエの木々は若葉を芽吹きはじめ、モクレンが大きな蕾を開きはじめ、自然の色づきを賑わせていた。公園は多数の老若男女で賑わっている。観光を楽しんでいる風体の人も少なくないが、公園内の至る所に据え付けられている椅子に座りゆったりと時を過ごしている人々の姿は、まさにフランスらしい時の過ぎゆくさまを写し出してくれている。つかの間の太陽のぬくもりを体の奥底にまでにじみこませるかのよう、微動だにしない姿勢をどれほどの時の間、とり続けるのだろうか。

それらの人々に混じって、ぼくも一つの椅子を占領し、先程買い求めた本のページを繰る。“Le cercle des poètes disparus” (『死せる詩人の会』)。(故)ロビン・ウィリアムズ主演のアメリカ映画で、そのフランス語シナリオである。1990 年のオスカー賞受賞作品。この映画はフランスでも公開され、1990 年代のフランス教育界に大きな衝撃を与えたという。わが国では『今を生きる』というタイトルで上演された。「今を生きる」、このラテン語のセリフは映画中に出て

それらの人々に混じって、ぼくも一つの椅子を占領し、先程買い求めた本のページを繰る。“Le cercle des poètes disparus” (『死せる詩人の会』)。(故)ロビン・ウィリアムズ主演のアメリカ映画で、そのフランス語シナリオである。1990 年のオスカー賞受賞作品。この映画はフランスでも公開され、1990 年代のフランス教育界に大きな衝撃を与えたという。わが国では『今を生きる』というタイトルで上演された。「今を生きる」、このラテン語のセリフは映画中に出て

くるのだが、それにしてもじつに見事な邦題を付けたものだ。今の息づかいを押さえることによって将来の生活を豊かに保障するはずだという支配的な教育観——とくにそれはわが国の1980年代の管理教育、能力主義教育に現れた——に対して、青年期まっただ中を生きる若者たちに青年期そのもののあり方を問い直させ、それに教師がどのように関わるべきかを強烈にスクリーン上で語らせる。場面場面が脳裏に焼き付いているこの本は、ぼくにとって、格好の語学学習材でもあり、また、教育とは何かを何度も問い直させられる「研究書」でもある。

読書に没頭していた耳に幼い声のざわめきが伝わってきた。リュクサンブール宮殿正面の噴水の周りを、幼い子どもたちの群がトランペットとトロンボーンなどの奏者の後に続いて行進していた。子どもたちは一人ひとりが思い思いの仮装をしている。どこかの幼稚園が謝肉祭を子どもたちのために準備したのだろうか。ぼくも子どもたちの行進の後をついていくことにした。



奏者、20数人の子どもの列、そしてその保護者の群、やや外れてぼくが続く。その光景をカメラアングルで見つめてみるとほほえましくも奇妙に写ることだろう。異形の老外国人はいったい一群とどういう関係にあるのだろうか、と。行進は宮殿を正面にして左手の階段を昇り、そのまま公園の外に続く芽吹き始めたマロニエの木々に挟まれた道へ、と抜けていった。

公園を出た後、子どもたちの一行とは反対に、ぼくはリュクサンブール宮殿に沿った道をパンテオンに向かってそぞろ歩きを楽しむことにした。2000年4月から1年間のパリ滞在中に何度も楽しんだぼくの「パリの歩き方」の再現である。この道の楽しみは、宮殿の柵や外壁、窓に飾られている大きな看板を、ゆっくり時間をかけて眺めることであった。かつての散策で印象に残っているのは、大自然の情景をたっぷりと写し出した空中写真展の案内であった。写真展はリュクサンブール公園内の美術館で催されていたのだが、その案内のため

に十数枚もの写真が解説付で展示されていた。それだけで美術館に入らなくても十分に満足することができたほどである。その他にも、リュクサンブール宮殿壁面の看板は、フランス共和国の、その時々歴史・文化事情を示してくれていた。この看板はぼくにとっては格好の現在進行形のフランス案内となるわけである。

今年の美術館は何の催しもないかの外見であった。通りは美術館の前を過ぎて、10メートル程で右にカーブする。リュクサンブール宮殿に差し掛かったところで、大きな窓枠いっぱいを覆う大きさの看板が数枚下げられているのがいやでも目に入った。いずれもヴィクトル・ユゴー(Victor HUGO)の写真入りである。今年—2002年—はユゴー生誕200周年記念の年だと看板の下の方に書かれており、それより上の部分には、数枚のうち一枚はおなじみの“Les Misérables” (『レ・ミゼラブル』)の文字が記されていた。その他のものはぼくにとってはまったくなじみのないものであった。

ユゴーと言えば『レ・ミゼラブル』、ただそれだけしか、ぼくの貧相な意識にはインプットされていない。思えば、彼との出会いは数回ある。ぼくが10歳の頃『ジャン・バル・ジャン』の書名で親しんだ原作者と、小学校6年の時の学芸会で、生涯でただ一度の経験だが、台本を与えられ、しかしセリフが一切無い「司祭の付き人」という役柄が与えられて恥ずかしの演技をさせられた『銀の燭台』の原作者、青年期に入ってただただ暇を持て余したあげくに手に取った文庫本『レ・ミゼラブル』の原作者、それぞれはすべてヴィクトル・ユゴーであり、しかしぼくらの精神形成史においては、それぞれが異人物としてイメージされているわけである。が、それでもやはり、パン一切れを盗んだ罪人が生涯、それを原罪とする累罪を背負って生きなければならなかったという「主題」に自分自身がどう向かいあうか、という点では共通している。

そのユゴー像をかすかに揺れ動かしてくれたのが、一年間のフランス滞在中にかいま見た、19世紀半ば過ぎにかけての第2共和制期そして第3共和制の胎動期における激動のフランス社会に生きる人々に寄り添って発言をしていた文豪・ユゴー像、政治家・ユゴー像との触れあいであった。それと同時に、庶民が飢えに苦しむときにも、通常は食材になることの無かった小型動物(ネズミ、イヌ、ネコなど)、中型動物(ウマなど)、大型動物(ゾウなど)を好んで求め

食を楽しむ趣味主義者としてしての実像を見せていたユゴー像との触れあいであった。これらは、精神形成史におけるユゴー像をさらに豊かにしてくれたかという、必ずしもそうではない。とくに趣味主義者としてのユゴー像に、わずかではあるが、嫌悪感を覚えたというのが正直なところである。

さて、一枚を除いてはなじみのないユゴーの偉業を伝える看板の中に、まさに目を丸くさせられるものに気づいた。それには次のようにあった。



DISCOURS (演説)

VICTOR HUGO

DU PROJECT DE LOI DUR L'ENSEIGNEMENT (教育法案)

“L'enseignement primaire obligatoire, c'est le droit de l'enfant”

(「義務の初等教育、それは子どもの権利である」)

つまり、その看板は、ユゴーが、何年かの、どこかでの演説で、教育に関する法案についてのもので、初等教育を義務とし、その教育は子どもの権利として位置づけるべきだ、と言っているということ、ユゴー生誕 200 周年を顕彰する重要な業績として公示しているわけである。はて……。ぼくの頭の中は

ぐるぐると、既存の知識のありっただけを動員して、この公示の意味を考え始めた。ユゴーが教育について発言していることを知ったのがはじめてであるばかりか、何らかの教育法案に関して、初等義務教育を子どもの権利として位置づけていることもはじめて知ったことである。とりわけ、彼が教育を子どもの権利としているというのは、深い感動を覚えると同時に、わが教育学・歴史学知識の浅さをただただ恥じらうばかりであった。

周知のようにわが日本において義務教育を国民の権利（「子どもの権利」は当然のことながら含まれる）としたのは、第二次世界大戦終了後のこと日本国憲法・（旧）教育基本法がはじめてのことである。思想史的に言えば 1920 年代には登場する考え方ではあるが、いわゆる「昭和の暗黒時代」の中ではそのような考え方はどうも実現に移しようのないものであった。世界史的にはそれより 80 年ほど前の「パリ・コミューン」（1871 年、フランス名「ラ・コミューン・ド・パリ 1871」）において、極めて短い時間ではあったが制度化され実施に移された。

では、ユゴーの、教育に関するこの演説は、時期的にまた実質的に、「パリ・コミューン」とどのように関わっているのだろうか。ぼくが直ちになすべきことは、「義務教育は子どもの権利である」と主張した演説が、いつ、どこでなされ、その内容はどのようなものであるのかを知ることである。生誕 200 周年を記念して書店ではユゴー著作コーナーが設けられているに違いない、しかしその膨大な著作の中から、discours、l'enseignement primaire obligatoire、le droit de l'enfant をキーワードとして目的の文献に行き当たるには、あまりにもぼくの語学力は貧困である。

ぼくの足はもと来た道の方に向いていた。ユゴーのこの発言が法案の策定に関わったことを考えてみると、彼が国民議会の議員であったことと密接に絡み合っているはずである。1850 年前後から 1870 年代にかけての国民議会の記録を示す史料、そしてできればそのころの教育に関する史料、さらにユゴーがそれらに関わっていることを示す史料を探そう。そのぼくの意志は、新刊本の書店に足を向かわしめるのではなく、一年間の滞在の史料探索でたいそう世話になった古書店に向かわしめた。それはリュクサンブール公園裏門のすぐそばにある。



ボンジュール、ムッシュ。コマ
ンタレブー？

一年ぶりの店主の笑顔は少しも変わっていなかった。店主もぼくのことをしっかり覚えてくれており、固く握手を交わした。相変わらず「パリ・コミュン」の史料を探しているのか？とぼくに問いかける眼は笑っている。ウ

ィ。今度はどれだけ滞在するの？3週間です。短いね。舌も唇もフランス語を語る風には動いてくれないもどかしさ、単語がどうしても出てこないいらだたしさに蹴飛ばされて、あろうことか日本語が飛びでてくるのを押さえようもなく、一通りの旧交を温める会話を交わした。あいさつを終えると同時に書店内の棚を眼がさまよう。パリの古書店の標準的な店舗の構えである、つまり、4メートル四方の広さの空間の、入り口を除いたすべての壁面が天井まで据えられた書棚であり、そこにびっしりと古書が収められている。この古書店は社会科学並びにフランス喜劇が専門である。ぼくが探索する棚は入り口から左手の書架3段と右手の書架2段程度である。古ぼけていはいるが革張りに金文字の書物の数々が、歴史と図書文化の重々しさを語っている。時には首を横にし、時には眼鏡をしっかりとかけ直し、手に取って、ページをめくる。

手に取った一冊は‘VICTOR HUGO et SON TEMPS’（『ヴィクトル・ユゴーとその時代』）と題された書物で1881年に刊行されたものである。ユゴーが生みだした作品とそのバックグラウンドを編年体で綴っている。挿入されている挿し絵はパリ・マレ地区にあるユゴー博物館に展示されているものと多くが重なっていた。約500ページ、全40章からなる。その場で概要を知り、必要度確かめるにはとても困難な、というよりぼくの語学力では気の遠くなるほどの膨大な内容量である。とりあえず、フランスの教育制度の一つの画期となっている1850年前後のページを確かめた。その時期は、教育を自由にするとはいつつ、その実質はカトリック教会勢力に教育の実際を委ねてしまうファルウ（Falloux）法が成立している。このころユゴーは国民議会議員であったから、も

し教育について何らかの発言をしているとしたら、この時期が候補の一つではないかとあたりを付けたわけである。すると・・・・・・・・！！

「彼（ユゴー）は、親の権利よりはるかに尊い**子どもの権利**として、無償かつ義務教育を強く主張した。」(p.238)

との一文が眼に飛び込んだ。しかも、「子どもの権利」をイタリック体で表記しているのだ。この書物が刊行された年を考えると、フランス共和国に、はじめて無償、義務、世俗教育（わが国の憲法・旧教育基本法と共通する教育概念である）が確立しはじめた頃である。それを思うと、この『ヴィクトル・ユゴーとその時代』という書物の持つ歴史性も感じるができるわけである。150ユーロとの値段表示から約 2 割引で購入することになった。日本円にして約 15,000 円。歴史への旅の謎解きのテキストとして、ぼくには十二分に価値のあるものとの出会いに、喜び勇んで宿への帰路に就いた。もちろん、その道すがら、新刊本のユゴー・コーナーを覗き見ることを忘れはしなかった。そして、彼の日記・演説選集、ならびに権利と法などについての演説などを集めた選集を買い求めた。くだんの「子どもの権利」についての演説は、1850 年 1 月 15 日の国民議会でなされており、その全文を知ることができた。

ユゴーは同年 1 月 11 日の日記で、国民議会の多数派が国家・社会の動乱を防ぐために実直な努力をしていることを認めるが、しかしそれは方針を誤っている、かえって火に油を注ぐようなものだ、と記している。教育の自由化、しかしカトリック教会に教育の実権を委ねるといふ民衆教育の方策は、確かにユゴーの予感通りとなった。その一方で「義務教育を子どもの権利とする」というユゴーの提案の実現に向けて、フランス社会は大きく動き出したのである。わが国がその恩恵に浴していないと、誰が断言できるだろうか。「権利」や「人権」の思想・制度を何でもアメリカの押しつけだと騒ぐ偏狭なナショナリストたちは、この史実をどのように捉えるのだろうか。

(参照：[ユゴーの「教育の自由」に関する演説](#)（解題ならびに翻訳）)